

## 難波西鶴と

## 海の道

【51】

森田 雅也

『好色一代男』(天和2(1682)年刊)「巻八の四『都の姿人形』は長崎の丸山遊郭を舞台にしています。

世之介は、京や大阪の恋人たちに別れを告げ、これからの暮らし向きに必要な金銭的援助も与え、長崎へとやってきました。

ところで、丸山遊郭は面白い歴史を有した遊里でした。『国史大辞典』によると、「丸山が遊里として開

かれたのは、寛永19(1641)年のことであった。一説には、それ以前、この地の一部は太夫町と呼ばれ、遊女屋が3軒あったが、寛永19年の集娼制によって、市中にあった寄合町が移転して来たため、丸山町と改められたとある。延宝年間(1673-81)刊『長崎土産』では、遊女屋30軒・遊女数335人(太夫69人)……とありま

また、『日本大百科全書』には、「江戸時代には京・江戸・大坂と並ぶ大規模な遊郭だったが、鎖国下の唯一の開港地として独特の制度をもった。遊女は唐人行、オランダ行があつて日本人相手と区別し、オランダ行が島への出張を認められ、唐人行が唐人客のために市中への外出が自由であるなど、元禄2(1689)年に唐人屋敷内に居住制限されたのちも比較的自由に外出できた。また、名附遊女といつて、名

## 世之介感嘆の宴も

養料を払って遊女屋に在籍のまま唐人らの妾となるものがいたとあります。

『好色一代男』にも、唐人行、オランダ行の遊女について書かれていたことは前回書きましたが、とても特異な郭と言えます。

世之介が長崎まで下

つてきたニュースは、たちまち、京都の四条河原での若衆遊びや島原の遊郭で一座を共にしたことがある人々を喜ばせました。そこで、丸山遊郭の女郎たちに能を演じさせてもてなします。

遊女たちは見事、『定家』『松風』『三井寺』の三番を舞います。折しも初紅葉の美しいとき。さらに35人の遊女たちが色とり

どりのつややかな衣装に身を包み、世之介歓迎の酒宴を盛り上げます。

世之介も「我、京にて35両(約350万円)の鴉を焼鳥にして太夫の肴にせし事」より勝ったぜいたくな宴と舌を巻いてしまします。

長崎の人々が都の遊女たちを見たいと言うと、世之介は長崎から実在の太夫そっくりの姿人形を取り出します。京島原17人、江戸吉原8人、大坂新町19人。皆、世之介のなじみの遊女です。長崎の粋人もこれには脱帽。さすが好色男ですね。

(関西学院大学文学部文学言語学科教授)

## 特異な遊郭・長崎丸山